

「揺籃期の産婦人科・新生児研究会」

日本産科婦人科・新生児学会 名誉会員

北海道大学医療技術短期大学部 名誉教授 鈴木 重統

肌寒い晩秋の東京で「第一回産婦人科血液研究会」が行われたのは1976年11月18日であり、会長は東京医科大学の相馬廣明教授（本学会名誉会員）であった。

「産婦人科と出血」の問題は洋の東西を問わず重要な問題であるにも拘わらず、日本産科婦人科学会においては妊娠中毒症や子宮がんの一つの症候として扱われただけであり、わずかに「日本産科婦人科学会連合専門部会」においてのみ「血液専門部会」として妊娠中毒症や子宮がんとは別に独立した扱いをうけていた。

当時の日本産科婦人科学会は、春の「総会」、夏の「連合専門部会」、秋の「臨床大会」と三つの柱から成り立っていたが、学会が多すぎるということで総会のみで統一され現在に至っている。

こうした流れとは別に、1966年3月28日に品川信良 弘前大学教授（本学会名誉会員、故人）が第18回日本産科婦人科学会（会長 三谷 靖 長崎大学教授）の宿題報告「産婦人科における出血について」を担当し講演されたが、講演原稿を読むことなしで満場の堂を魅了した1時間であった。臨床講義のような語り口で実地医家にはもちろん当時入局二年目で初心者の小生にも容易に理解できる名講演であった。

この頃から産婦人科医の間に血液の凝固や線溶に対する関心が深まったような気がしてならないが、DIC (disseminated intravascular coagulation) という言葉が使われるようになったのは1970年ころからで、国際会議などでも定義をめぐっては激論がなされ、「DIC はいっそ『Disseminated International Confusion』とでも言った方がよい」などと皮肉っぽく語るドイツの友人も居た。

産婦人科血液研究会の第一回から第十五回までのことは相馬廣明教授が縷々記述されているので割愛するが発足当時より「産婦人科血液」（日本産婦人科・新生児血液学会誌の前身）として機関誌を出版されていることは例を見ないことであり、事実わが恩師であるミュンヘン工科大学のH.Graeff教授（故人）などは「世界で唯一の専門誌」と絶賛しておられた。

このような経緯から第十三回研究会の世話人を担当させていただいた小生が「産婦人科・新生児研究会のあゆみ」を1988年に上梓し、昨年第十四回ならびに第十五回を加えて増補版を発刊したが、ご協力いただいた小林隆夫名誉会員には感謝にたえない。

なお、この増補版は国会図書館に寄贈され、学会事務局（担当：椎木みどり氏）に感謝状が届いたことを付記したい。